

成菩提院所蔵「題未詳聖教」紹介

― 伝存聖教から柏原談義所を復元する

大 島 薫

はじめに―「柏原談義所」について

寂照山円乗寺（滋賀県米原市柏原）は成菩提院と通称された天台宗寺院である（小稿では通称に従い、以下、成菩提院と称する）。中世後期に「柏原談義所」として興隆し、日本各地そして仏教の諸宗派において展開した「談義所」のなかでも著名であったことで知られている。成菩提院の梵鐘銘文（延宝六（一六七八）年、成菩提院第廿三世秀仙の選述）には、成菩提院が「柏原談義所」として「海道三箇談場（談義所）」の一つに数えられていたことを、次のように刻記している。

近江洲坂田郡柏原郷、寂照山円乗寺成菩提院者、伝教大師創建、海道三箇談場、勸学能化、梵刹也

しかし、この銘文に記される「海道三箇談場」とは、いずれの

寺院であつたらう。成菩提院第五九世 尾上寛仲は「柏原談義所の成立」（『叡光』三〇、一九七三年十二月、『日本天台史の研究』（山喜房仏書林、二〇一四年）に再録）と題した論考に、「海道三箇談場」について「柏原談義所」である成菩提院と「仙波談義所」（星野山無量寿寺、埼玉県川越市小仙波町）とを挙げるが、その根拠を提示していない。あるいは、先に引用した梵鐘銘文が起草された事情に鑑みれば、秀仙が成菩提院第廿三世として梵鐘を再鑄造するにあたって、成菩提院を「海道三箇談場」の一つと位置付けた可能性もないわけではない。寺社の縁起や由緒書に、史実と異なる記述が混じり込むことは珍しくないからである。ただし、この銘文に刻まれた「成菩提院が著名な談義所すなわち学問寺院であつた」という理解は、中世後期に遡る。『茨城県史料 中世編Ⅰ』（茨城県史編さん中世史部会編、一九

七〇年）に所収される「逢善寺文書」のうち『檀那門跡相承資并恵心流相承次第』（宝徳四（一四五二）年三月十九日注記）にも、次のように明記されるからである。

日本二三ヶ所ノ堅義、叡山堅義ハ三塔、海道立義ハ柏原、板東立義ハ長南也

「堅義（立義とも）」とは、「論義」において営まれた「学僧の試験」をいう。学僧は、この試験によって僧階昇進や補任の要件とされた。そして「天台談義所」については、「堅義」に備えて天台教学を学ぶ場（学問寺院）であつたというのが通説である。先に引用した「逢善寺文書」に拠れば、成菩提院は宝徳年間に遡り、「比叡山の三塔や、三途河頭極楽東門蓮華台上阿弥陀坊太平埜山本実成院長福寿寺（千葉県長生郡長南町）とともに、海道（東海道）における学問寺院である」と認識されていたわけである。「逢善寺文書」は成菩提院内部で作成された聖教でないため、成菩提院が学問寺院として、中世後期に遡って注目されていたことを確認させるのである。

ちなみに先に引用した銘文を刻まれた梵鐘には、その再鑄造にあたって秀仙が起草した「請殊蒙十万杵越助成鑄造洪鐘狀」も伝存している。そして、その秀仙起草の一節には、成菩提院において日々営まれていたであろう、僧侶が研鑽を積んだ実態

について次のように記されている。

顕密発開、累代之碩室、海道勸学、法灯之名地矣、往昔晦藏不易之為行業、別請堅義之嚴論場、屈近里遠境之淨侶、招台嶺數輩之碩学、堅問終夜之往復問答、探題曉天之精決義勢、併天長地久国土豊遠矣

尾上寛仲は「柏原談義所の発展」と題した論考に、右に引用した「請殊蒙十万杵越助成鑄造洪鐘狀」の一節を読み解いて、「談義所」における学問が如何なる方法をもって営まれたかについて伝える、貴重な記述であると紹介されている（『印度学仏教学研究』二三の二、一九七五年三月、前掲『日本天台史の研究』に再録）。

成菩提院が学問寺院として中世後期から興隆したことは、成菩提院の中興開山（開基とも）である貞舜に『天台名目類聚抄』や『柏原案立』に代表されるような著述があるほか、『円乗寺開山第一世貞舜法印行狀』や『本朝高僧伝』に確認されるように、天台教学に秀でた学僧であつたと伝えられていることにも推測させる。そして貞舜に限らず、成菩提院歴代住職が天台教学に研鑽を努めたことも、尾上寛仲が成菩提院に伝存する聖教を論拠として「柏原談義所の成立」「柏原談義所の発展」（前掲論文）「天台学問寺に見られる法度・条例——成菩提院文書より——」

『天台学报』十七、一九七五年十二月、前掲『日本天台史の研究』に再録）などの論考に明らかにしている。成菩提院に現存する聖教には、成菩提院が中世後期以降、天台教学を学ぶ学問寺院（談義所）として興隆したことを確認し得るわけである。

ただし、成菩提院に伝存する聖教は「堅義」に必要な天台教学（顕教）を記したもののばかりでない。尾上寛伸は「台密西山流——成菩提院灌室の成立について——」（『印度学仏教学研究』二五の二、一九七七年三月、前掲『日本天台史の研究』に再録）に、『阿婆縛抄』を始めとする天台密教を伝える聖教が成菩提院に伝存することも指摘したが、その後、福田栄次郎を中心とする成菩提院文書ならびに聖教の調査が始まり、成菩提院に伝存する聖教の全貌が明らかになるに従って、「談義所」として興隆したことは異なる実態、すなわち密教寺院として興隆した成菩提院を認識せざるを得なくなってきたのである。

成菩提院が密教寺院としても興隆したことは、たとえば『近江国輿地志略』（膳所藩士寒川辰清編纂 享保十（一七三四）年）の卷之八十二「坂田郡第六 柏原駅」「成菩提院」項に

天台宗海道三箇談林の随一にして、穴太流伝法灌頂の密室なり

と記されるほか、先に引用した秀仙起草による「請殊蒙十万杵

越助成鑄造洪鐘狀」にも「顕密発開、累代之碩室、海道勸学、法灯之名地矣」と記述されている。成菩提院が天台密教寺院として機能していたことも、江戸時代には周知されていた。成菩提院は「談義所」であるとともに、密教寺院としても認識されていたのである。

顕密一致を旨とした成菩提院が、「談義所」としてのみ注目されるに至ったのは、「談義所」を中世後期に特徴的な学問拠点と見做した日本仏教史研究に所以するだろう。しかし、そういった研究成果に関わることなく、成菩提院に伝存する聖教は寺院史をものがたる。「伝存する聖教に寺院史を辿る」、当たり前の研究方法を再認識せざるを得ないのである。ゆえに小稿は、この当たり前の研究方法を実践するべく、伝存聖教から成菩提院を復元する試みの一つとして、成菩提院に伝存する聖教一帖を紹介することにした。

一、成菩提院所蔵「題未詳聖教」の書誌と翻刻

小稿に紹介する成菩提院聖教は、柵型折本一帖である。そこでまず、本一帖の書誌を提示する。

・書名未詳。内題・尾題はなく、外題のみ「顕密」とある。

しかし、「顕密」の文字は、本文を記す文字に比べて墨の付き具合が悪い。本文が記された後、料紙の痛みが進んだ段階で記入されたと判断させる。

- 残存状況は、表紙が半分ほど切り取られているほか、最終丁も四行分欠ける。

- 書写年代は、南北朝時代から室町時代極初期と推定する。本一帖には、テクストの来歴を明らかにする、本奥書や書写奥書、識語、印記など一切ない。ただし、本一帖を書写したのは、円済（貞舜の師の一人であることが、成菩提院に伝存する『瑜祇秘決』などから確認できる）であると確認できる。成菩提院に伝存する『聖徳太子講法則』（円済自筆）と同筆だからである。円済の生没年は不明だが、学僧として活動したであろう時期は現存する聖教から比定できるため、本一帖が書写された時期についても、円済が学僧として活動した「南北朝時代から室町時代極初期」と推定した。

- 装幀は梃型折本。
- 表紙は本文共紙（原装）。ただし、本文共紙の表紙は、その半分ほど切り取られている。
- 料紙は楮紙打紙。

- 界線なし。

- 訓点は、本文書写時に加えられた墨書きによる合点と声点とがある。

- 紙背あり。紙背には本文と同筆をもつて「十二支」や「十二月」などの異名が記されている。

- 法量は、縦十四・二、横十四・二。

次に、本一帖を翻刻する。翻刻するにあたっては、対句が明確になるよう改行を改めたほか、読点を加えた。また、旧字体や異体字が使用される場合には一部を除いて新字に改め、声点については省略することにした。

（表紙）

顕密

（見返し）

八万法藏 一心三観 甚深妙典

（二丁）

十界十如難隔、皆歸真如之一理^二、

五輪五相難定、悉収阿字之一法、

煩惱冬氷解菩提之春水、

無明夏雲消法性之秋空^二、」

／＼三諦相即之水面、真空冥寂之光耀、新浮、
一実中道之山頂、妄想顛倒之雲霧、無聳、
／＼胎藏界者、以五輪成身ヲ証無相法身也」

(二丁)

文云、謂以字燒因字而更生等^文

發生法界心之覽字火、

燒尽業煩惱之阿字薪、

能燒智火、忽滅所燒

灰燼独存、此名曰以字」

燒字、

又、流注錢字之智水、

潤於阿字之死灰、

滋長菩提之芽茎^ヲ、

成無漏之五大^ヲ、因字更是也、

修因向果ノ從本垂迹也

／＼金剛界者、以五相成身、

悟聲広得道、」

(三丁)

破三業道闡於五重之空觀^ニ、

呈三菩提光於五智円明、

徹心明之秋月、照無染心之胸間、
觀金剛夏蓮開、」

周辺法界之空中、

／＼蓮花胎藏者、肉団心蓮也、」

(四行分欠、料紙が切り取られる)

(紙背一丁、四行分欠)

辰^{シンシヨ} 執徐

巳^{タノケワウ} 太荒落

午^{トムサウ} 敦牂

羊^{ケウカウ} 協洽

鶉火

(紙背二丁)

申^{クシタシ} 涒灘

酉^{サカカク} 作罽

戌^{エンホ} 闍茂

亥^{エムケム} 大淵猷

子^{コムム} 困敦

丑^{ヒメフム} 赤奮若

十二月

正月 大簇 孟春 孟陬^ス

上春 獻春 獻歲

二月 夾鐘^{ケフシヨウ} 仲春 仲陽」

三月 沽洗 季春 暮春

三春 芳春 花春 花月

青陽 青律

四月 仲呂 孟夏 維月^キ 首夏

五月 蕤賓^{スイ} 仲夏

六月 林鐘 季夏

九夏 朱夏 炎天

炎夏 朱明

(紙背三丁)

馬商 炎景 炎節

夾律

七月 夷則^イ 孟秋 初秋

上秋 首秋 初商

八月 南呂 仲秋 中商

九月 無射^{エキ} 季秋 暮秋

抄秋 季商 抄商

三秋 白藏 金商 素秋 涼秋

清秋 素律

十月 應鐘^{キョウシツ} 上冬 孟冬 陽月

十一月 黃鐘 仲冬

十二月 大呂 季冬 暮冬

窮冬 寒冬

三冬 玄英 玄冬 玄律

信宿 十夜

嚴 寒冬

(紙背四丁)

四時 四騶^{スウ} 四上 已上四景也

四祀^キ 四年 五稔^{シム} 五年

一紀 十二年 玄序 遙年

貫序 年記

年歲 載祀 序紀

暮^キ 茲

二、『花鳥集』をめぐって

さて前章に翻刻したように、小稿に紹介する柁型折本一帖には、「顕教」と「密教」との趣旨が対句表現をもって記述されている（なお成菩提院に所蔵される柁型本については、牧野和夫「柁型折帖本について——中世寺院の活動と「書物」型態」『仏教文学』三〇に詳しい）。「煩惱」を「氷」に、「菩提」を「水」に、「無明」を「雲」に、「法性」を「空」に譬えるというのも、大乘仏典をはじめとして珍しくない。しかし、ともすれば難解な天台教学を、四季の風物に擬えながら解き明かすという方法

は、漢訳仏典を経て日本においてさらなる展開を見せる。そして対句に仕立てられた表現は項目ごとに分類収載され、対句例文集つまり実用書として使用されていた。

ところで小稿に紹介する一帖は、そういった対句例文集の一つである『花鳥集』と一結にされて伝存していた。装幀は言うまでもないが、法量や料紙、本文を記した筆跡に至るまで同一であり、本一帖と『花鳥集』とは異なる文献であるが、これを書写した円済は、これら二つの文献を一連のものとして、同時に書写しておいたのである。

『花鳥集』は編纂者は未詳ながら、その序文に寛治七（一〇九三）年に成立したと明記され、収載された対句は、次の十項目に分類されている。

第一発心 第二観心 第三善業 第四惡業 第五經教
第六知識 第七輪廻 第八無常 第九時節 第十利益
（諸本によっては「第十一孝養 第十二不孝養」が加わる）

なお『花鳥集』については、山岸徳平「澄憲とその作品——作文集を中心として」（『日本諸学振興委員会研究報告』一九三八年、『日本文学研究』（有精堂、一九七二年）再録）、後藤昭雄『「花鳥集」』（『語文』六六、一九九六年、『本朝漢詩文資料論』勉誠出版、二〇一二年）などの論考があり、それぞれに現存す

るテキストを紹介しつつ、こういった対句例文集が編纂された意義について考察している。

『花鳥集』は、対句を収載する十項目に推考し得るように、説法用の対句例文集として、各種の顕教法会を営むにあたって、具体的には「施主段」や「表白」を作文するために使用されたことを指摘させる。しかし一方、小稿に紹介する「題末詳聖教」は談義や灌頂といった、『花鳥集』とは異なる目的において使用されたであろうことを推考させる。ただし、この二つの文献を書写した円済は、『花鳥集』とともに「顕教」と「密教」とを解き明かした対句をも必要としたのだろう。東大寺図書館に所蔵される『花鳥集』が『褒美抄』（『澄憲作文集』と同一文献）と合写されているように、書写者の必要によって異なった文献が合写合冊されることは珍しいことでない。

なお筆者は、成菩提院に所蔵される『花鳥集』を含む説法資料を紹介するにあたって、成菩提院中興開山である貞舜や第二世慶舜が「説法上手」の讃辞をもって伝えられていたことも指摘した（『成菩提院所蔵の説法資料について』『仏教文学』三〇、二〇〇六年三月）。叡山文庫 真如蔵『法則集』（写本一冊、本奥書に「文禄三年二月中旬 西樂院円智」、書写奥書に「慶長七年五月吉日 求法亮玄」とある）には、貞舜と慶舜とが安居院澄

憲や聖覺と並び称せられているからである。澄憲や聖覺が「説法上手」と称賛され、数多くの説法を記録されていることは言うまでもない。『花鳥集』が成菩提院に伝存する所以を探れば、貞舜や慶舜さらには成菩提院歴代が説法用文集を必要とした、その活動の実態を髣髴させるのである。そして『花鳥集』とともに、前章に翻刻した一帖が書写され、一結の聖教として伝存したことは、貞舜の師である円済、そして成菩提院と、その周辺において、「顕教法会」のみならず「密教法会」が営まれていたことを指摘させるのである。なお、この二つの文獻、すなわち『花鳥集』と前章に翻刻した一帖とが中世後期に遡り一結であったことも、成菩提院に伝存する『真俗合割集』『亮運寄進事』（亮運は成菩提院第十五世）に確認することができる。

成菩提院が「柏原談義所」として著名であったことは事実である。しかし、その実態を探れば、顕密一体を旨として、密教寺院として興隆していたことも確認し得るのである。小稿に紹介するのは、成菩提院に伝存する一帖に過ぎない。しかし、本一帖には、中世後期における「柏原談義所」を髣髴させるのである。

「談義所」における学問（顕教）が、古代における寺院と異なる。

つて、地方における拠点として、身分階層をも越えて展開していたことは周知である。そして、古代寺院との相違は、学問の方法、さらには学問に用いられるテキストにも及んでいたのである（拙稿「直談再考」『日本仏教総合研究』三、二〇〇四年）。では、成菩提院すなわち「柏原談義所」に繰り広げられた密教についても、「談義所」における学問（顕教）と同様、中世後期に特徴的であると指摘することはできるだろうか。もちろん、密教が地方へ伝播し、身分階層を越えて展開したことは、中世前期から確認されている。しかし、その伝授方法や、伝授の内容容において、古代寺院と異なっていたか否かについては、「談義所」と称された新しい学問寺院であっただけに、解き明かす必要があるだろう。伝存聖教からいかなる実態が復元されるかについては、今後の課題としたいと思う。

（おおしま かおる／本学教授）